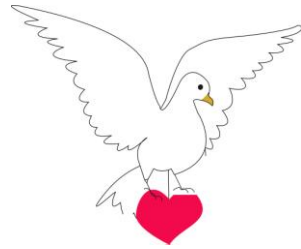


『おじいちゃんが孫に語る戦争』 田原総一郎 講談社

ジャーナリストの田原総一郎さんが、独自の取材をもとに、小学生の二人のお孫さんたちに語る「戦争」。当時、小学生だった田原さんの戦争体験だけではなく、日本がなぜ戦争をすることになったのか、日本の歩んで来た道がとても丁寧にわかりやすい言葉で語られています。歴史が苦手な人にも読みやすい一冊。



『クラウディア奇蹟の愛』 村尾靖子 海拓社

「…私は戦場でないところで戦争を体験した」。終戦時、朝鮮半島に住んでいた蜂谷彌三郎さんは、無実の罪でソ連軍によってシベリアへ連行され、妻子とも離ればなれに…。その過酷な人生を支えたのは、1人のロシア人女性クラウディアさんでした。それから50年後、蜂谷さんが日本に住む家族と連絡が取れたとき、クラウディアさんがとった行動とは？ そして日本で待っていた、妻の久子さんは？ 戦争によって運命を翻弄された3人の実話。

※蜂谷さんは、今年6月倉吉で亡くなりました。96歳でした。



『ヒロシマに原爆がおとされたとき』

だいたい 大道あや ポプラ社

原爆が投下されたその瞬間、生活は一変した。自ら被爆しながら、ずっと封印してきた原爆の記憶。大道さんは「原爆の図」を描いた丸木位里の妹で、画家でもあります。過去を避けるように長い間戦争とは関係ない主題で絵本を描きつけてきました。90歳を越えてから、ようやく描き語った被爆体験。屋根を越えてとばされながら、命をとりとめた著者が見た風景とは…。付属のCDでは、本人の肉声で、静かに力強く、原爆・戦争の恐ろしさが語られています。



『奇跡はつばさに乗って』 源和子 講談社

サダコさんの祈りは世界に届いていた。今から約70年前、自らの死をと向き合いながら、千羽鶴を折り続けた少女がいました。その小さな千羽鶴一羽一羽にこめた願い。それは、時を越えて、国境を越えて、恨みや憎しみ、悲しみの感情を人々から取り払い、「思いやり」の心に変えていきます。人と人とのつながりの中に、平和は生まれるのかもしれませんが。

『世界を平和にするためのささやかな提案』

春香クリスティーン・中川翔子ほか 河出書房新社

「平和にする」って、自分に何ができるんだろう。何だか難しいことをしないとイケないんじゃないか？ いやいや、まず例えば「5回に1回は怒らない」、「人の意見の反対の意見を探してみる」など…。この本では、22人の著者による、世界を「平和にする」ためのアイデアを紹介。今からできること、始めてみませんか。



『わたしたちの「無言館」』 窪島誠一郎 アリス館

みなさんは「無言館」を知っていますか？「無言館」は、長野にある美術館。この美術館に飾られているのは、無名の画家の卵たちの作品。戦争中、美術を学ぶ学生だった彼らは、後ろ髪を引かれる思いで筆を置いて戦場に向かい、そのまま帰らぬ人となりました。彼らが遺した絵はいったい何を語りかけてくるのでしょうか。



戦争は昔の出来事？ いいえ、世界では、今このときも紛争が起こっている地域があります。

今年は、第二次世界大戦終結から70年。みなさんもこの機会に、平和について考えてみませんか？